■近松半二 浄瑠璃作者。衰退する上方浄瑠璃最後の作者として、後世に残る作品を多数創作した。

ちかまつはんじ

・・・・・・1725＝ 伊藤東涯の門人穂積以貫の子に生まれる。

父以貫は儒者ながら大坂の竹本座の文芸顧問をつとめたこともあり、近松門左衛門と親交深く、浄瑠璃評注釈「難波土産」(1738)所載の近松の芸術論(いわゆる“虚実皮膜の論”)も以貫の聞書きとされている。

享保大飢饉・1732＝ 7歳：

・・・・・・1734＝ 9歳：

・・・・・・1743＝18歳：

徳川吉宗隠居1745＝20歳：

青年時は放蕩したと伝えるが、

2世竹田出雲(外記)の門に入って竹本座の作者となり、近松に私淑してその姓を名のる。

徳川吉宗没・1751＝26歳：*初作の「役行者大峰桜」(立作者出雲)は「妹背山婦女庭訓」の母体となる作で、思想や作法に後年の半二の特色が認められる。

・・・・・・1752＝27歳：

以後、竹田出雲、三好松洛、吉田冠子ら先輩に伍して、竹本座の新作に合作者として名を連ね、

源内物産会・1757＝32歳：*出雲の死去後、遺稿を完成させる形をとった「昔男春日野小町」で再び頭角をあらわし、宝暦後半期竹本座の作品には半二色が濃厚となっていく。

「日高川入相花王」、

大岡忠光没・1760＝35歳：「極彩色娘扇」、

・・・・・・1761＝36歳：「由良湊千軒長者」などが著名。

・・・・・・1762＝37歳：「奥州安達原」以後、半二の健筆にもかかわらず、人形浄瑠璃は衰退期にさしかかり、

・・・・・・1763＝38歳：「天竺徳兵衛郷鏡」、

加賀千代句集1764＝39歳：「傾城阿古屋の松」「京羽二重娘気質」、

蘭銭初輸入・1765＝40歳：「蘭奢待新田系図」「姻袖鏡」、

忠臣蔵大当り1766＝41歳：「本朝廿四孝」「太平記忠臣講釈」、

明和事件・1767＝42歳：「関取千両幟」「三日太平記」。竹本座も退転し、再興はされたものの興行的に不安定な状態が続く。

久留米藩工事1768＝43歳：「傾城阿波の鳴門」、

・・・・・・1769＝44歳：「振袖天神記」「近江源氏先陣館」、

・・・・・・1770＝45歳：この年まで立作者近松半二、脇作者竹本三郎兵衛に群小作者が加わった体制で、名作を相次いで生むが、

御蔭参流行・1771＝46歳：*傑作「妹背山婦女庭訓」(三好松洛らと合作)を著した後、安永期は世話物が多くなる。

田沼意次老中1772＝47歳：

♫船蝦夷来 1778＝53歳：「往古曾根崎村囃」「心中紙屋治兵衛」「道中亀山嘶」、

源内獄中死・1779＝54歳：

・・・・・・1780＝55歳：「新版歌祭文」、

蘭学階梯・1783＝58歳：*最後の傑作「伊賀越道中双六」を著し、上演前に没した。